陸上競技が私を成長させる

大学院教育学研究科保健体育専攻運動学専修2回生　丹羽　敦巳

十二年もの間続けてきたこと

何に対しても飽きっぽい私が、十二年もの間続けてきたことがある。それが陸上競技である。

陸上競技を通してこの十二年の間に多くの人と出会い、たくさんのことを学ぶことができた。この十二年間、陸上競技が私を成長させてきたと言っても過言ではないだろう。

私は陸上競技の中でも地味な印象が強い、投てき種目を専門としている。私が陸上競技を始めたのは中学校に入学してからだが、陸上競技といえば「走る」というイメージしか持っていなかった私は、走る種目を専門にしていた。

教師への憧れ

しかし、中学二年生の春に腰を痛めたために、走れない時期があり、走れない分、筋力トレーニングばかりをしていた。そのおかげで、それまではトレーニングの一環として投げていた砲丸投げの記録が急激に伸びていき、それまで思いもしなかった全国大会に出場するまでの記録を出すようになっていた。

中学生になるまで特にスポーツをしていなかった私が、たった三年間で全国大会に出られるようになったのは、熱心に陸上競技の指導をしていただいた顧問の先生がいたからである。陸上競技のことはもちろんのこと、あいさつなどの礼儀作法に関しても厳しく指導していただき、肉体的にも精神的にも大きく成長した三年間であった。私がその先生に憧れて、教師になりたいと考え出したのも中学生のころからである。

陸上部員と

進学で悩む

高校へ進学してからも陸上競技を続け、インターハイと国民体育大会の両大会で三位に入賞することができた。全国大会で表彰台に立ったことは、生涯忘れることの無い貴重な経験ではあったが、三年間、厳しいトレーニングを一緒にやり遂げた仲間の存在はとても大きいものであった。

保健体育の教師を目指していた私は、大学の進学先ですごく悩んだ。悩んだ結果出した答えは、陸上競技の強豪校である私立大学への進学であったが、その大学では保健体育の教員免許を取ることはできなかった。

大学の全国大会でも四位になることができ、充実した四年間を過ごして卒業を迎えたが、私が取得したのは社会科の教員免許であった。

現役を退くまで持ち続けたい夢

「やはり保健体育の教師になりたい」と思い、私が門を叩いたのは奈良教育大学の大学院であった。大学院では本来、研究に専念することが本位ではあるが、指導教官である小野教授と若吉教授の「実践理論こそ体育学の本質」の教えのもと、研究を進めながら、競技者としても汗を流す日々を送っている。

大学院二回生となった今年度は、八月に行われる世界陸上の代表選手選考会にもなった日本グランプリという全国大会六位になることができた。

私にはまだまだ国際大会に出場するような競技力は無いが、日本代表のユニフォームを着るという夢は、現役を退くまで持ち続けたいと思う。

今まで私は陸上競技を通してたくさんの人達に支えられながら成長してきた。大学院修了後は、今まで支えていただいた人達に感謝の気持ちも込めて、今度は私自身が周りの人達を支えていきたいと思っている。

表彰式で

砲丸投げ